

4.6 緑

4.6.1 緑の質

4.6 緑

4.6.1 緑の質

計画地及びその周辺の現存植生の状況等を調査し、計画地において回復育成する主要な植栽予定樹種の環境適合性、植栽基盤の適否及び必要土壌量について、予測及び評価を行った。

(1) 現況調査

ア. 調査項目

本事業における主要な植栽予定樹種の環境適合性、植栽基盤の適否及び必要土壌量について、予測及び評価するための基礎資料を得ることを目的として、次の項目について調査を行った。

- (ア) 現存植生状況及び生育状況
- (イ) 周辺地域の生育木
- (ウ) 植栽土壌
- (エ) 植栽予定樹種
- (オ) 潜在自然植生
- (カ) 生育環境（地形・地質等の状況、日照、潮風等の状況、地域社会とのつながり）
- (キ) 土地利用の状況
- (ク) 関係法令等による基準等

イ. 調査地域

(ア) 現存植生状況及び生育状況

計画地内とした。

(イ) 周辺地域の生育木

計画地周辺の日進町公園、西口さくら緑地、西口さんかく公園及び上並木公園とした。各公園の位置は、図 4.6.1-1 に示すとおりである。

(ウ) 植栽土壌

調査地点は、図 4.6.1-2 に示すとおりである。

基本断面調査は 1 地点、簡易断面調査は 4 地点とした。

(エ) 植栽予定樹種

計画地内とした。

(オ) 潜在自然植生

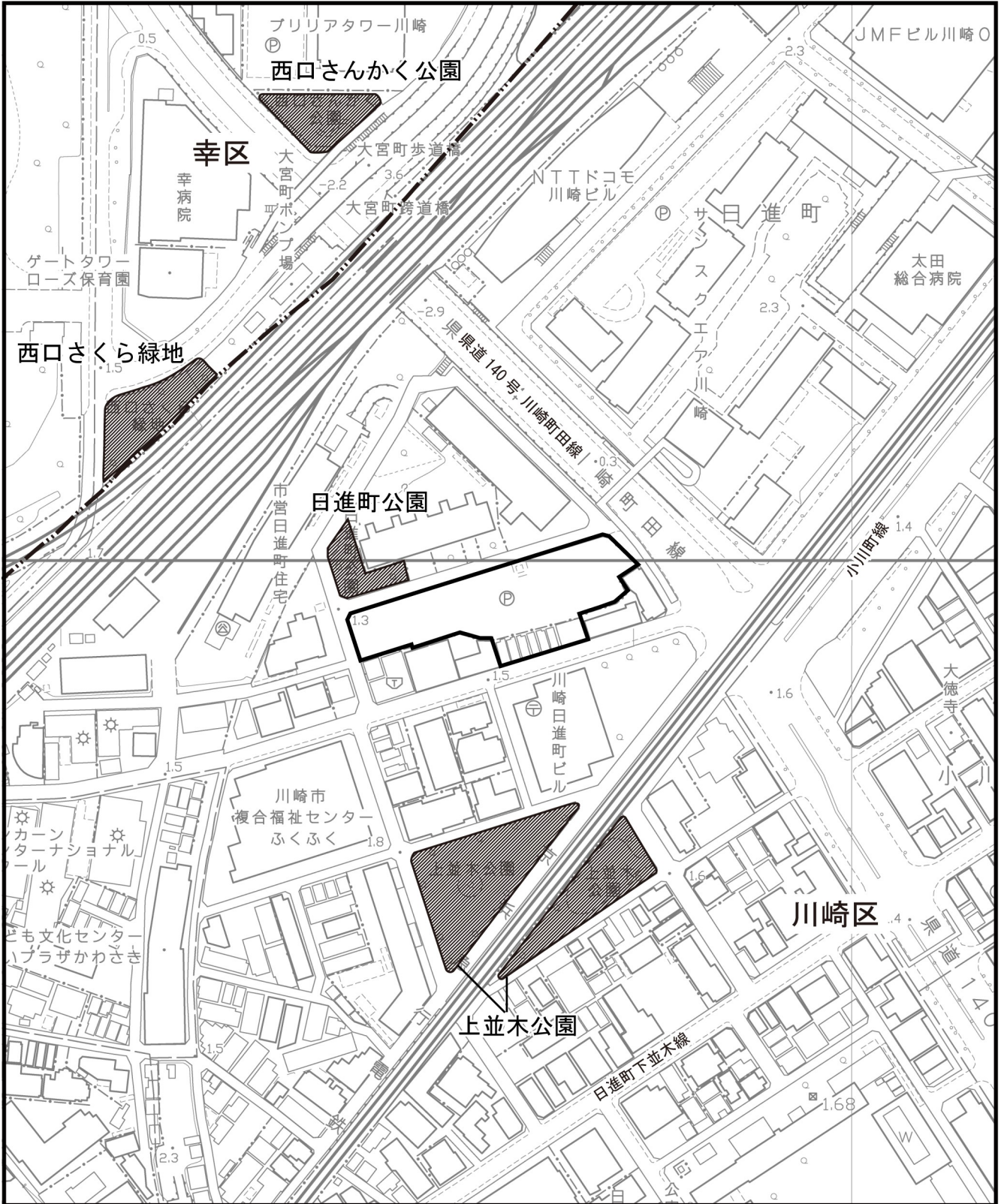
計画地及びその周辺とした。

(カ) 生育環境

計画地及びその周辺とした。

(キ) 土地利用の状況

計画地及びその周辺とした。



凡例

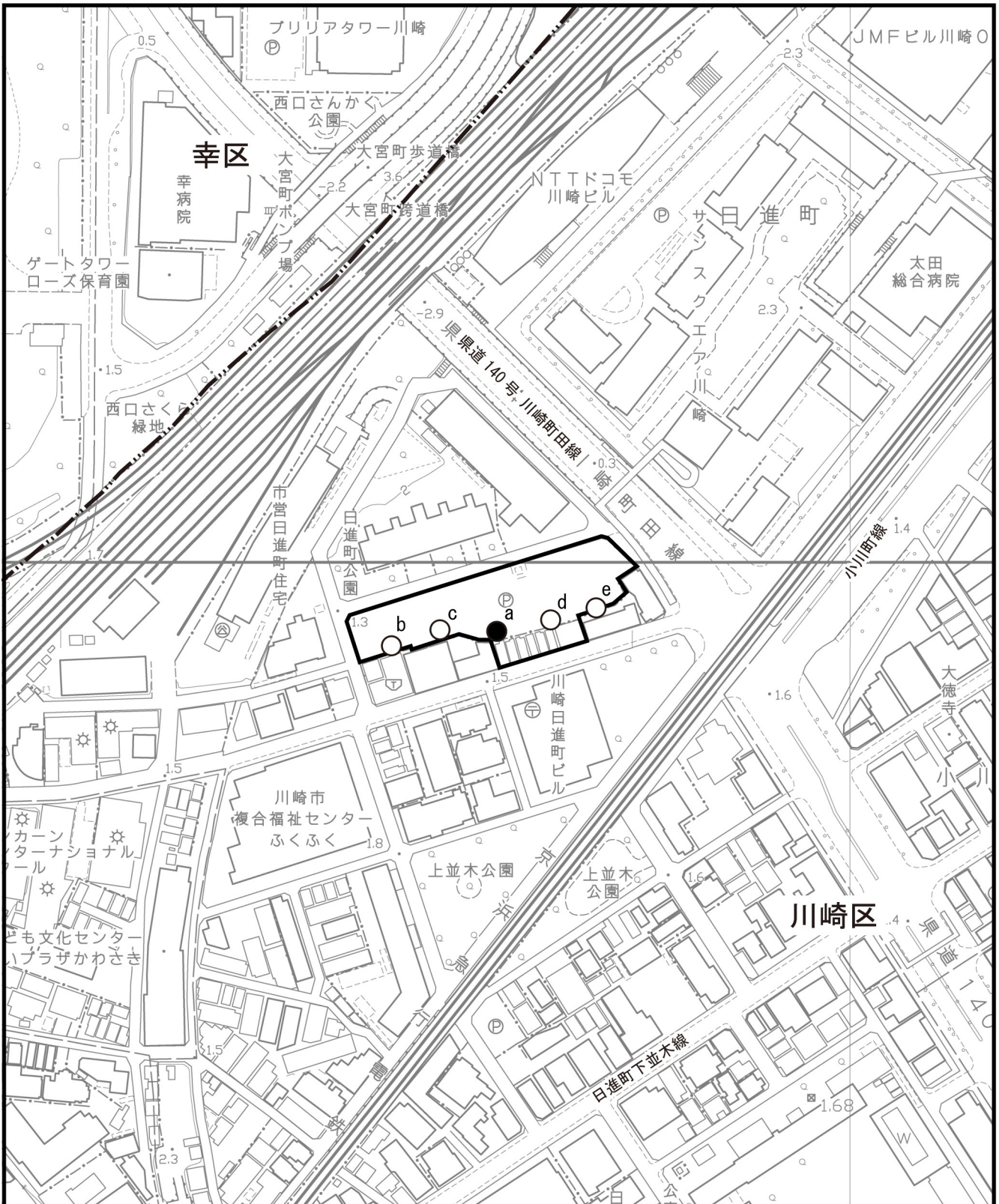
-  計画地
-  区界
-  生育木調査地点







Scale 1:2,500



図 4.6.1-1 周辺地域の生育木調査地点



凡例

- | | | | |
|---|-----|---|----------|
|  | 計画地 |  | 基本断面調査地点 |
|  | 区界 |  | 簡易断面調査地点 |



Scale 1:2,500



図 4.6.1-2 植栽土壌調査地点

ウ. 調査方法等

(ア) 調査時期

a. 現存植生状況及び生育状況

令和3年6月10日(木)

b. 周辺地域の生育木

令和3年6月10日(木)

c. 植栽土壌

令和3年6月10日(木)

(イ) 調査方法

a. 現存植生状況及び生育状況

現地踏査により、計画地内の現存植生の状況を調査した。

b. 周辺地域の生育木

図4.6.1-1に示した公園に植栽されている樹種を対象に、樹木活力度を調査した。

樹木活力度調査の調査項目及び評価基準は、表4.6.1-1に示すとおりであり、このほかに樹高、枝張、幹周についても調査した。

表4.6.1-1 樹木活力度の調査項目及び評価基準

調査項目	1 良好、正常なもの	2 普通、正常に近いもの	3 悪化のかなり進んだもの	4 顕著に悪化しているもの
樹勢	生育旺盛なもの	多少影響はあるがあまり目立たない程度	異常が一目でわかる程度	生育劣弱で回復の見込みなしとみられるもの
樹形	自然樹形を保つもの	一部に幾分の乱れはあるが、本来の形に近いもの	自然樹形の崩壊がかなり進んだもの	自然樹形が全く崩壊し、奇形化しているもの
枝の伸長量	正常	幾分少ないが、それほど目立たない	枝は短小となり細い	枝は極度に短小し、しょうが状の節間がある
枝葉の密度	正常、枝および葉の密度のバランスがとれている	普通、1に比べてやや劣る	やや疎	枯枝が多く、葉の発生が少ない。密度が著しく疎
葉形	正常	少しゆがみがある	変形が中程度	変形が著しい
葉の大きさ	正常	幾分小さい	中程度に小さい	著しく小さい
葉色	正常	やや異常	かなり異常	著しく異常
ネクロシス	なし	わずかにある	かなり多い	著しく多い

注) ネクロシス：え死(細胞組織の破壊)

出典：「改訂25版 造園施工管理(技術編)」(平成17年5月 社団法人日本公園緑地協会)

<活力度判定>

活力度指数：1.00～1.75	1.76～2.50	2.51～3.25	3.26～4.00
活力度状態：良好、 正常なもの	普通、 正常に近いもの	悪化のかなり 進んだもの	顕著に悪化 しているもの
活力度評価： A	B	C	D

注) 活力度指数は次式により求めたものである。

・単木の場合

$$Y = \frac{\sum Xi}{n}$$

Y：樹木活力度指数 Xi：項目別指数 n：項目数

・特定樹種の場合

$$\bar{Y} = \frac{\sum Yj}{m}$$

\bar{Y} ：特定樹種の樹木活力度指数 Yj：樹木活力度指数
m：特定樹種の調査本数

出典：「造園施工管理－技術編－」（昭和58年3月第8版 社団法人日本公園緑地協会）

c. 植栽土壌

(a) 基本断面調査

基本断面調査は、深さ1m、幅1m程度の土壌断面を掘削して、「林野土壌断面法」に基づく形態調査（基本断面調査）を実施し、土壌型判定等の基本となる断面形態を把握した。また、中層土から下層土まで試料を採取し、土壌の理化学性に関する室内分析に供して植栽土壌としての適否を検討した。分析項目は、表4.6.1-2に示すとおりである。

なお、調査方法及び調査内容の詳細は、資料編「6. (1) 1) 調査方法」（p. 資-53～57参照）に示すとおりである。

表 4.6.1-2 理化学性の分析項目及び分析方法

分析項目		分析方法
土壌物理性分析	粒径組成	JIS A 1204 及び国際土壌学会法
	三相分布	実容積法
	有効水分保持量	加圧法及び遠心法
	飽和透水係数	変水位法
土壌化学性分析	pH (H ₂ O)	ガラス電極法
	電気伝導度	1:5 水浸出法
	全窒素	ケルダール法
	有効態リン酸	トルオーグ法
	塩基交換容量	セミマイクロ・ショレンベルガー法
	交換性カリウム	原子吸光光度法

(b) 簡易断面調査

計画地の土層厚の変化を調査するため、4地点において、長さ1mの検土杖を用いた簡易的な形態調査（簡易断面調査）を行い、層位・土色・土性・乾湿・可塑性・還元性（ $\alpha - \alpha'$ ジピリジル反応）・腐植の7項目及び表土に相当する層厚を調査した。

なお、調査方法及び調査内容の詳細は、資料編「6. (1) 1) 調査方法」（p. 資-53～57参照）に示すとおりである。

d. 植栽予定樹種

本事業の緑化計画の内容を明らかにすることにより、植栽予定樹木の種類を把握した。

e. 潜在自然植生

次の既存資料の収集・整理により、計画地周辺の潜在自然植生の状況を把握した。

- ・「神奈川県潜在自然植生」（昭和51年 宮脇昭ほか）
- ・「川崎市および周辺の植生」（昭和56年 宮脇昭ほか）

f. 生育環境

次の既存資料の収集・整理及び現地踏査により、計画地周辺の生育環境を把握した。

- ・「神奈川県土地利用現況図〔横浜東〕」（令和6年 神奈川県）等

g. 土地利用の状況

次の既存資料の収集・整理により、計画地及び周辺の土地利用の状況を把握した。

- ・「神奈川県土地利用現況図〔横浜東〕」（令和6年 神奈川県）
- ・「ガイドマップかわさき 用途地域等」（令和7年10月閲覧 川崎市ホームページ）等

h. 関係法令等による基準等

次の関係法令等の内容を整理した。

- ・「川崎市緑の保全及び緑化の推進に関する条例」（平成11年12月 条例第49号）
- ・「川崎市緑の基本計画」（平成30年3月改定 川崎市）
- ・「川崎駅周辺地区緑化推進重点地区計画」（令和3年3月 川崎市）
- ・「川崎市緑化指針」（令和4年2月一部改正 川崎市）
- ・「川崎市みどりの将来像」（令和8年3月 川崎市）
- ・「地域環境管理計画」（令和3年3月改定 川崎市）

エ. 調査結果

(ア) 現存植生状況及び生育状況

a. 計画地の現存植生状況

計画地の現存植生状況は、表4.6.1-3に示すとおりである。

計画地の植生区分は、裸地、建築物等が100.0%となっていた。

なお、調査時点で存在していた建築物は、令和8年5月現在では解体され、更地となっている。

表 4.6.1-3 計画地の現存植生状況

区 分	面積 (m ²)	割合 (%)
裸地、建築物等	約 3,740	100.0
合 計	約 3,740	100.0

b. 計画地の生育状況

計画地には、植生の生育が見られなかった。

(イ) 周辺地域の生育木

計画地周辺における樹木活力度調査結果は、表 4.6.1-4 に示すとおりである。

高木 28 種、中木 20 種、低木 10 種が確認された。平均活力度指数は 1.00～1.69 であり、判定 A を示していた。なお、周辺地域の樹木活力度調査結果は、資料編 表 5-9～12 (p. 資-58～61 参照) に示すとおりである。

表 4.6.1-4(1) 周辺地域の樹木活力度調査結果

分類	樹種名	総数 (本)	日進町 公園 (本)	西口 さくら 緑地 (本)	西口 さんかく 公園 (本)	上並木 公園 (本)	平均 活力度 指数	判定		
高木	常緑	マテバシイ	27	7	0	0	20	1.26	A	
		ヒイラギモクセイ	4	4	0	0	0	1.10	A	
		ゲッケイジュ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		クスノキ	8	2	1	4	1	1.69	A	
		ヤマモモ	11	9	2	0	0	1.00	A	
		ヤブツバキ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		クロガネモチ	1	0	1	0	0	1.00	A	
		カナメモチ	3	0	0	3	0	1.04	A	
		シラカシ	4	0	0	4	0	1.07	A	
		サンゴジュ	1	0	0	0	1	1.00	A	
	広葉	トウネズミモチ	2	0	0	0	2	1.06	A	
		スダジイ	1	0	0	0	1	1.00	A	
		ヤマモミジ	5	3	0	0	2	1.05	A	
		エゴノキ	4	4	0	0	0	1.47	A	
		オオシマザクラ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		チョウセンアサガオ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		ヤマボウシ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		ケヤキ	8	4	0	0	4	1.02	A	
		ソメイヨシノ	15	0	8	0	7	1.10	A	
		アオギリ	3	0	0	0	3	1.00	A	
		コブシ	2	0	0	0	2	1.00	A	
		ナンキンハゼ	5	0	0	0	5	1.05	A	
		アキニレ	1	0	0	0	1	1.00	A	
		カキノキ	1	0	0	0	1	1.00	A	
		クワ	2	0	0	0	2	1.00	A	
		針葉	メタセコイア	1	0	0	1	0	1.13	A
			イチョウ	2	0	0	0	2	1.00	A
		特殊	アツバキミガヨラン	1	1	0	0	0	1.00	A

表 4.6.1-4(2) 周辺地域の樹木活力度調査結果

分類	樹種名	総数 (本)	日進町 公園 (本)	西口 さくら 緑地 (本)	西口 さんかく 公園 (本)	上並木 公園 (本)	平均 活力度 指数	判定		
中木	常緑	広葉	ヤブツバキ	4	4	0	0	0	1.10	A
			オオムラサキツツジ	30	30	0	0	0	1.00	A
			ゲッケイジュ	1	1	0	0	0	1.13	A
			サザンカ	22	22	0	0	0	1.26	A
			トベラ	8	8	0	0	0	1.00	A
			ランタナ	1	1	0	0	0	1.00	A
			シャリンバイ	2	1	0	0	1	1.07	A
			ナツミカン	5	5	0	0	0	1.13	A
			ピラカンサス	1	1	0	0	0	1.13	A
			キンモクセイ	42	0	30	12	0	1.34	A
			カナメモチ	2	0	0	2	0	1.63	A
	アベリア	7	0	0	0	7	1.00	A		
	落葉	サンショウ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		ヤマモミジ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		オオシマザクラ	3	3	0	0	0	1.00	A	
		ガクアジサイ	3	3	0	0	0	1.00	A	
		モモ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		ユキヤナギ	20	0	0	20	0	1.00	A	
	特殊	バショウ	1	1	0	0	0	1.00	A	
ユッカSP ^{注)}		1	1	0	0	0	1.00	A		
低木	常緑	広葉	サツキ	30	30	0	0	0	1.00	A
			シャリンバイ	16	16	0	0	0	1.00	A
			ランタナ	3	3	0	0	0	1.00	A
			ハマヒサカキ	10	10	0	0	0	1.00	A
			オオムラサキツツジ	210	10	200	0	0	1.00	A
			コクチナシ	30	0	0	0	30	1.25	A
	落葉	ユスラウメ	1	1	0	0	0	1.00	A	
		アジサイ	12	2	0	10	0	1.00	A	
		ユキヤナギ	3	3	0	0	0	1.00	A	
		アキニレ	2	0	0	0	2	1.00	A	

注) SP: 現地確認において属レベルでの同定は可能であったが、種の特定までは行っていない樹種を指す。

(ウ) 植栽土壌

a. 基本断面調査

基本断面調査結果の概要は、表 4.6.1-5 及び図 4.6.1-3 に、土壌の物理化学性の分析結果は、表 4.6.1-6 に、物理化学性の評価の目安は、表 4.6.1-7 及び図 4.6.1-4 に示すとおりである。

地点 a の土壌状態は、人為的影響を強く受けた造成土であり、有機物の堆積により生成された秩序性のある自然的な層位は認められなかった。また、全層にわたり固結しており緻密な壁状であり、若干還元状態であった。

地表の碎石層以下の土壌の物理性については、砂質埴壤土 (SCL) であるが、飽和透水係数が低く、有効水分保持量が少なかった。一方、土壌の化学性については、全窒素や有効態リン酸といった土壌養分が不足していた。また、コンクリート夾雑物を由来と考えられるアルカリ土壌が確認された。

以上の結果から、計画地内の土壌は植栽土壌としては良好ではないと考えられる。

なお、調査結果の詳細は、資料編「5. (3) 基本断面調査結果」(p. 資-62 参照) に示すとおりである。

表 4.6.1-5 基本断面調査結果の概要

地点	周辺状況	観察結果
地点 a	駐車場	地表面 30cm 厚の碎石層、若干還元した暗オリーブ褐色の砂質埴壤土 (SCL)、水分過多、やや強い可塑性、若干の還元、腐植不足、転圧により固結 (15~24mm)、コンクリート夾雑物が頗る富む建設残土、土粒子間に隙間のない壁状。

注) 観察結果の土壌硬度の数値は、各層における山中式土壌硬度計を用いた測定値を示す。

層位 (cm)	土壌断面図	土色	土性	乾湿	可塑性	還元反応	腐植	土壌硬度(mm)	石礫	植物根の分布状況	土壌構造	地下水位
GL 0								15				
10		2.5Y4/3 オリーブ褐色	碎石	半乾	なし	-	2%前後 または それ以下	24	礫土	なし	壁状	なし
20								22				
30								24				
40		2.5Y3/3 暗オリーブ褐	SCL	多湿	中	±	2%前後 または それ以下	18	コンクリート 夾雑物 頗る富む	なし	壁状	なし
50								24				
60								23				
70								24				
80								15				
90								21				
100								20				

注) 土性の SCL は、砂質埴壤土を示す。

図 4.6.1-3 地点 a における基本断面調査結果 (柱状図)

表 4.6.1-6 分析結果

項目		単位	地点 a
物理性	試料採取位置	cm	50~55
	土性	—	SCL
	粗砂 2.0-0.2 mm	%	31.2
	細砂 0.2-0.02 mm	%	27.8
	シルト 0.02-0.002 mm	%	18.1
	粘土 0.002 mm以下	%	22.9
	飽和透水係数	m/s	8.9×10 ⁻⁶
	有効水分保持量	L/m ³	54
	三相分布	気相	%
液相		%	34.6
固相		%	49.9
化学性	試料採取位置	cm	30~100
	pH (H ₂ O)	—	8.26
	電気伝導度	dS/m	0.11
	全窒素	g/kg	0.09
	有効態リン酸	mg/kg	84
	塩基交換容量	cmol (+)/kg	14.9
	交換性カリウム	cmol (+)/kg	0.65

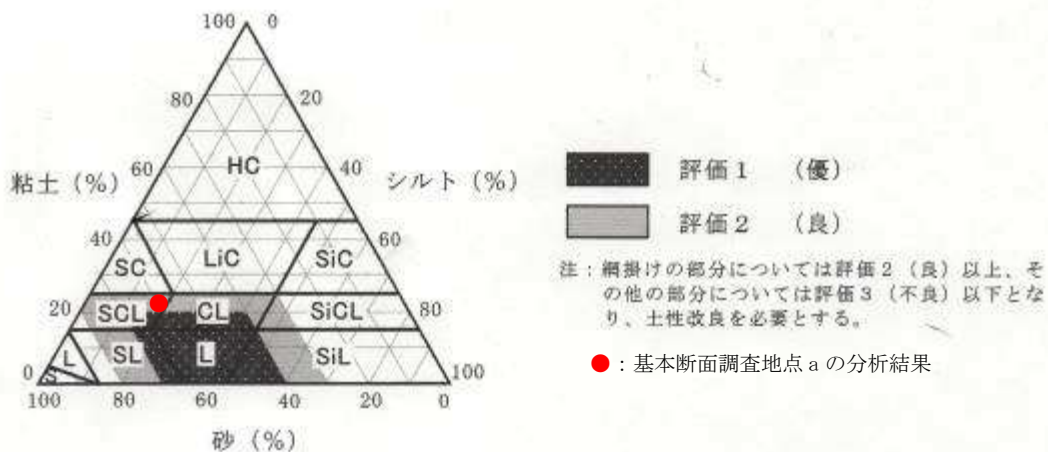
注) 網掛け(灰色)は、表 4.6.1-7 に示す評価基準における不良値を示す。

表 4.6.1-7 評価基準

区分		単位	1 (優)	2 (良)	3 (不良)	4 (極不良)
物理性	土性	—	三角座標に示す (図 4.6.1-4)			
	固相率 (硬質土壌)	%	40>	40~50	50~60	60<
	有効水分保持量	L/m ³	120<	120~80	80~40	40>
	飽和透水係数	m/s	10 ⁻⁴ <	10 ⁻⁴ ~10 ⁻⁵	10 ⁻⁵ ~10 ⁻⁶	10 ⁻⁶ >
化学性	pH (H ₂ O)	—	5.6~6.8	4.5~5.6 6.8~8.0	3.5~4.5 8.0~9.5	3.5> 9.5<
	電気伝導度	ds/m	0.1~0.2	0.2~0.5	0.5~1.5	1.5< 0.1>
	全窒素	g/kg	1.2<	1.2~0.6	0.6>	—
	有効態リン酸	mg/kg	200<	200~100	100>	—
	塩基交換容量	cmol (+)/kg	20<	20~6	6>	—
	交換性カリウム	cmol (+)/kg	0.4<	0.4~0.2	0.2>	—

注) 網掛け(灰色)は、地点 a の土壌が該当する区分を示す。

出典：「緑化事業における植栽基盤整備マニュアル」(社団法人日本造園学会 緑化環境工学研究委員会)
(平成 12 年 日本造園学会誌 ランドスケープ研究 63(3))



出典：「緑化事業における植栽基盤整備マニュアル」(社団法人日本造園学会 緑化環境工学研究委員会)
(平成 12 年 日本造園学会誌 ランドスケープ研究 63(3))

図 4.6.1-4 土性の評価基準

b. 簡易断面調査

簡易断面調査結果は、表 4.6.1-8 及び図 4.6.1-5 に示すとおりである。

計画地の土壌は、暗オリーブ褐色の腐植に乏しい劣悪土が広く分布している。

これらの土壌には、①固結、②水分の過多、③やや強い可塑性（透水・通気性不良）④還元状態、⑤腐植不足などの植物生育上の阻害要因が存在している。

なお、調査結果の詳細は、資料編「5. (4) 簡易断面調査結果」（p. 資-63 参照）に示すとおりである。

表 4.6.1-8 簡易断面調査結果

地点	観察事項
b	0～30 cmまで碎石層、30cm～100cm まで若干還元した暗オリーブ褐の砂質埴壤土（SCL）
c	0～30 cmまで碎石層、30cm～100cm まで若干還元した暗オリーブ褐の砂質埴壤土（SCL）
d	0～30 cmまで碎石層、30cm～100cm まで暗オリーブ褐の砂質埴壤土（SCL）
e	0～30 cmまで碎石層、30cm～100cm まで暗オリーブ褐の砂質埴壤土（SCL）

地点	層位 (cm)	土色	土性	乾湿	可塑性	還元反応	腐植	表土適性		
地点b	0									
	10	2.5Y4/3	碎石	半乾	なし	-	2%前後	×		
	20	オリーブ褐					または			
	30						それ以下			
	地点c	0								
		10	2.5Y4/3	碎石	半乾	なし	-	2%前後	×	
		20	オリーブ褐					または		
		30						それ以下		
		地点d	0							
			10	2.5Y4/3	碎石	半乾	なし	-	2%前後	×
20			オリーブ褐					または		
30								それ以下		
地点e			0							
			10	2.5Y4/3	碎石	半乾	なし	-	2%前後	×
	20		オリーブ褐					または		
	30							それ以下		
	地点b		40							
			50	2.5Y4/4	SCL	多湿	中	±	2%前後	×
		60	暗オリーブ褐				若干還元	または		
		70						それ以下		
		地点c	40							
			50	2.5Y4/4	SCL	多湿	中	±	2%前後	×
60			暗オリーブ褐				若干還元	または		
70								それ以下		
地点d			40							
			50	2.5Y4/4	SCL	多湿	中	-	2%前後	×
	60		暗オリーブ褐					または		
	70							それ以下		
	地点e		40							
			50	2.5Y4/4	SCL	多湿	中	-	2%前後	×
		60	暗オリーブ褐					または		
		70						それ以下		

図 4.6.1-5 簡易断面調査結果（柱状図）

(エ) 植栽予定樹種

本事業の緑化計画における新規植栽予定樹種は、表 4.6.1-9 に示すとおりである。

表 4.6.1-9 新規植栽予定樹種

区分	植栽予定樹種	植栽予定本数	樹高	目通周	葉張り
大景木 常緑樹	タブノキ等	15 本	約 10m	約 1m	約 3m

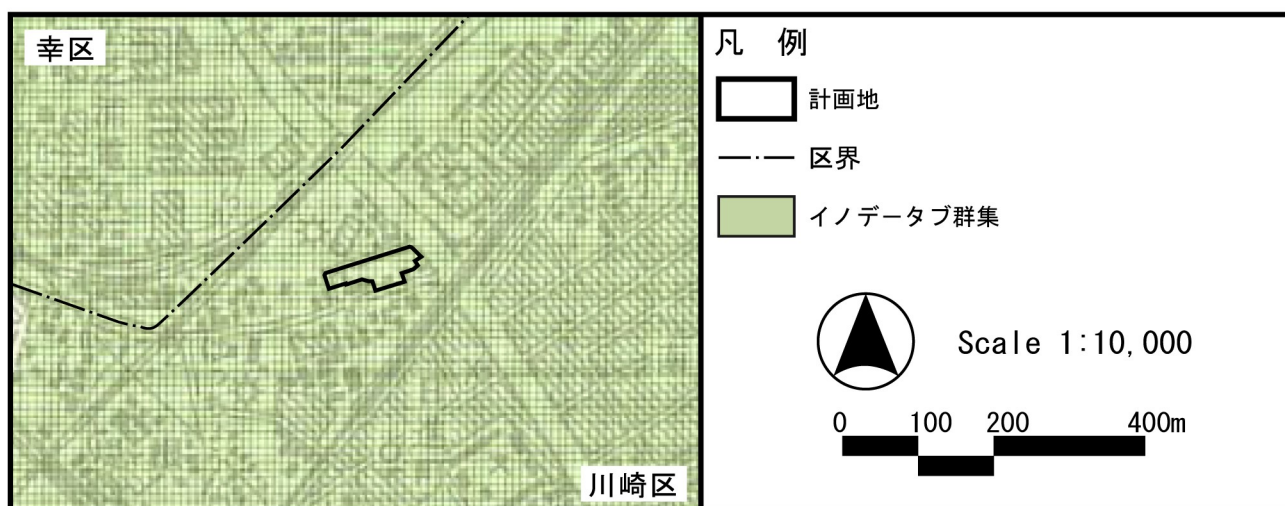
資料：「川崎市緑化指針」（令和 4 年 2 月一部改正 川崎市）

(オ) 潜在自然植生

既存資料「神奈川県における潜在自然植生」（昭和 51 年 宮脇昭ほか）及び「川崎市および周辺の植生」（昭和 56 年 宮脇昭ほか）によると、計画地及びその周辺の潜在自然植生は「イノデータブ群集」に属している。

潜在自然植生の状況は、図 4.6.1-6 に示すとおりであり、「イノデータブ群集」における主な生育種は、表 4.6.1-10 に示すとおりである。

なお、計画地及びその周辺における土地利用は、昭和 50 年代当時から現在に至るまで、工場等の土地利用から住宅地等へと変化しているが、これらはいずれも人工的土地利用であり、潜在自然植生の成立条件を左右するものではないことから、潜在自然植生についても変化はないものと考えられる。



資料：「川崎市および周辺の植生」（昭和 56 年 宮脇昭ほか）

図 4.6.1-6 潜在自然植生

表 4.6.1-10 イノデータブ群集における主な生育種

区分	主な生育種
	イノデータブ群集
高木層	タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ
低木層	アオキ、ヤツデ
草本層	イノデ、ヤブラン、キチジョウソウ、オオバジャノヒゲ

資料：「神奈川県における潜在自然植生」（昭和 51 年 宮脇昭ほか）

(カ) 生育環境

a. 地形・地質等の状況

計画地の北東側を多摩川水系の多摩川が北東から東へ、西側を鶴見川水系の鶴見川が北東から南西へ流れている。計画地付近の多摩川及び鶴見川は一級河川の区間である（p. 53、57 参照）。計画地は、標高（T.P.）+1.5m 程度の平坦な地形である。また、計画地北側、東側、西側には商業施設及び集合住宅等が広がっている。南側には文教・厚生用地も混在している。

b. 日照、潮風等の状況

計画地に近接して集合住宅及び商業ビル等が存在し、日照及び風に影響を及ぼす可能性がある。

計画地は東京湾から約 10km 程度離れており、周辺地域の生育木の現地調査において、潮風の影響を受けている生育木は見られない。

c. 地域社会とのつながり

計画地の現状は、駐車場等となっていることから、計画地周辺の地域社会とのつながりはない。

(キ) 土地利用の状況

計画地周辺の土地利用の状況は、「第 2 章 2.1.6 土地利用状況」（p. 63 参照）に示したとおりである。

計画地の用途地域は、商業地域に指定されている。計画地周辺の用途地域は、計画地の北、東、南側の地域は商業地域、北東側は近隣商業地域、西側は工業地域、準工業地域に指定されている地域がある。

(ク) 関係法令等による基準等

a. 川崎市緑の保全及び緑化の推進に関する条例

本条例は、川崎市における緑の保全及び緑化の推進に関して必要な事項を定め、市と市民及び事業者との協議により、良好な都市環境の形成を図り、もって現在及び将来の市民の健康で快適な生活の確保に寄与することを目的としている。

b. 川崎市緑の基本計画

緑の基本計画は、都市緑地法第 4 条に基づき策定する「緑地の保全及び緑化の推進に関する基本計画」で、「緑地の保全及び緑化の目標」、「緑地の保全及び緑化の推進のための施策」、「都市公園の整備の方針」等に関する事項を示すとともに、川崎市の緑を取り巻く実情を踏まえて、緑地の保全、緑化の推進、都市公園の整備を総合的に進めることを目的としている。

c. 川崎駅周辺地区緑化推進重点地区計画

本計画では、「みどりが人とつながる場や機会をつくり、川崎の多様性や歴史・未来を感じられるまちづくり」を基本理念に「(1)みどりが人と人をつなぎ、多様性を感じられるまちづくり」、「(2)みどりが骨格となり、歴史・未来を感じられるまちづくり」「(3)みどりと人がつながり、持続可能な社会形成を実現するまちづくり」の3つの基本方針に基づき計画の推進を図っている。

d. 川崎市緑化指針

本指針は、住宅や事務所など施設の設置目的や立地する周囲の環境などの諸条件に応じ、地域性を反映した個性的で付加価値の高い緑を保全・回復育成・創出する計画及び設計、並びにこれらに基づく適切な施工及び維持管理を推進するとともに、全市的な緑の水準の向上に寄与することを目的としている。

また、「川崎市緑化指針」には、緑化樹木の規格、地域特性に応じた緑化に適した緑化樹種、緑の量的水準などが記載されている。

e. 川崎市みどりの将来像

本計画では、「人と自然が共生する幸福な社会」の実現に向けて、ネイチャーポジティブ（自然再興）やサーキュラーエコノミー（循環経済）などの地球環境に関する世界的な潮流、気候変動などの社会環境の変化などに対して、これまで以上に高い意識を持って、目標とすべき将来像を示している。

「緑のつながり」「人のつながり」「みどりを活かしたまちづくり」の3つの柱に基づき、計画の推進を図っている。

f. 地域環境管理計画（令和3年3月改定 川崎市）の地域別環境保全水準

地域環境管理計画の地域別環境保全水準は、「緑の適切な回復育成を図ること。」と定められている。

(2) 環境保全目標の設定

環境保全目標は、「地域環境管理計画」の地域別環境保全水準を参考として、「緑の適切な回復育成を図ること。」と設定した。

(3) 予測、環境保全のための措置及び評価

ア. 予測

(ア) 予測項目

緑化計画で選定した植栽予定樹種の計画地における環境適合性、植栽基盤の適否及び必要土壌量について予測した。

(イ) 予測方法等

a. 予測地域

計画地内とした。

b. 予測時期

供用後とした。

c. 予測条件・予測方法

(a) 予測条件の整理

周辺地域の生育木及び植栽土壌の現地調査結果、土地利用計画、緑化計画を整理した。

(b) 予測方法

① 主要な植栽予定樹種の環境適合性

計画地周辺の樹木活力度調査の結果等を踏まえ、「川崎市緑化指針」に示されている緑化樹木と地域特性、環境特性との関係や、「川崎市および周辺の植生」に示されている潜在自然植生構成種等と計画地内の植栽予定樹種が生育環境に適合しているか比較する方法による。

② 植栽基盤の適否

植栽土壌調査の結果と緑化計画の内容を対比する方法による。

③ 必要土壌量

「植栽基盤整備技術マニュアル」（平成 25 年 12 月 改定第 2 版 一般財団法人日本緑化センター）に基づき、植栽基盤の整備に必要な土壌量を算出する方法による。

(ウ) 予測結果

a. 主要な植栽予定樹種の環境適合性

本事業の緑化計画における主要な植栽予定樹種の環境適合性予測結果は、表 4.6.1-11 に示すとおりである。主要な植栽予定樹種であるタブノキは、耐風性及び耐陰性の樹種であり、計画地の潜在自然植生の構成種に該当する。

また、図 4.6.1-7 に示すとおり、本事業の緑化範囲は、計画建築物等による日影や強風の影響を受けると想定される。主要な植栽予定樹種であるタブノキは耐風性及び耐陰性を持つこと、また、適切に管理を行うことにより、計画地の環境特性に適合するものと予測する。

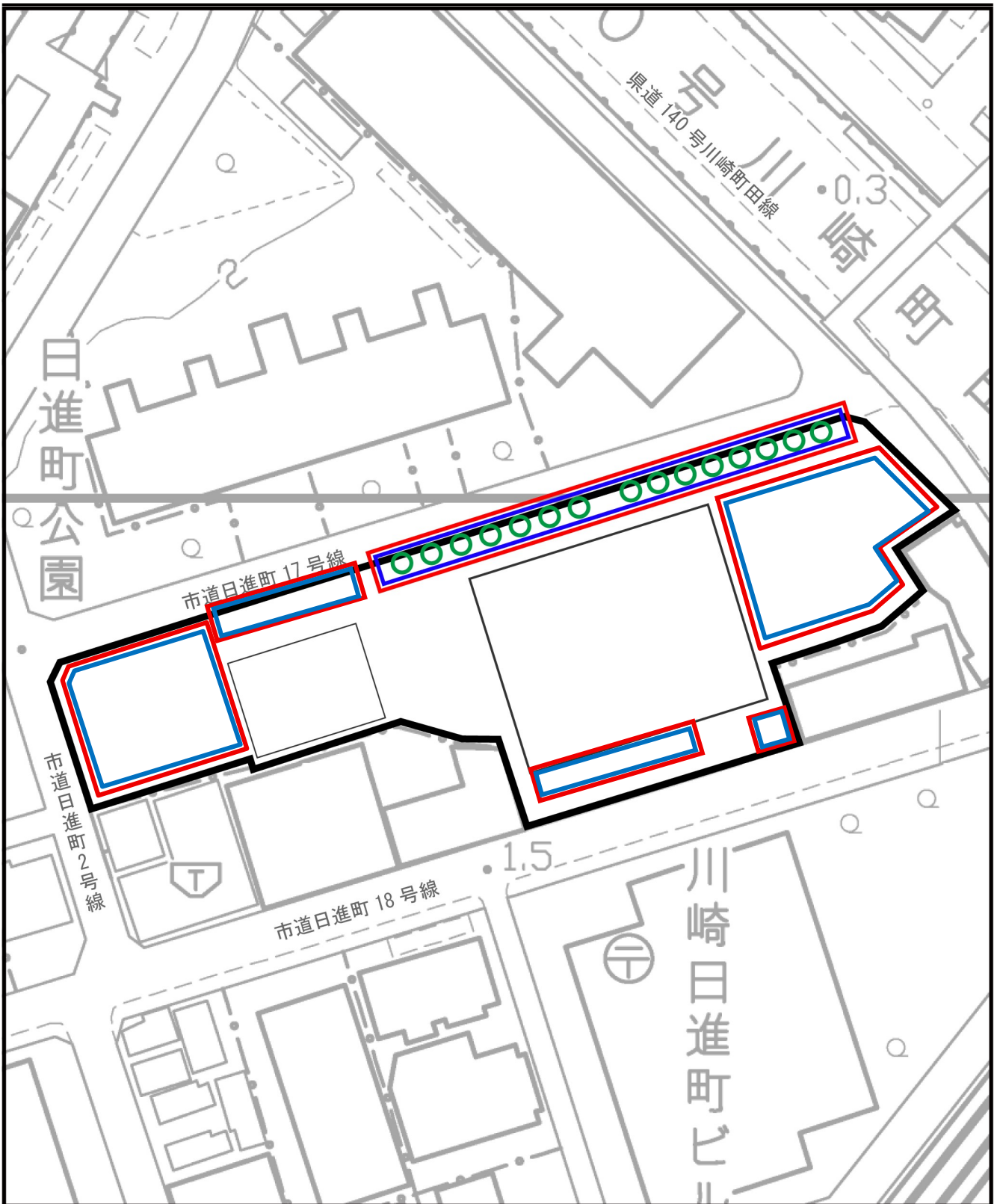
表 4.6.1-11 主要な植栽予定樹種の環境適合性予測結果

植栽予定樹種			川崎市緑化指針						現地踏査結果	既存資料	
			緑化樹木	特性				適地	地域特性	計画地周辺の公園で確認された樹種	潜在自然植生の構成種
				耐風性	耐陰性	耐湿性	耐乾性	住宅地の緑化	低地部		
大景木	常緑樹	タブノキ	○	○	○				○		

注 1) 表中の○印は、該当を示す。

2) 潜在自然植生の構成種は、計画地の潜在自然植生である「イノデータブ群集」で見られる種とした。

資料：「川崎市緑化指針」（令和 4 年 2 月一部改正 川崎市）
 「川崎市および周辺の植生」（昭和 56 年 宮脇昭ほか）



凡 例

- 計画地
- 大景木
- 耐陰性に留意する必要がある範囲
- 耐風性に留意する必要がある範囲



Scale 1:800



図 4.6.1-7

環境特性に留意する必要がある範囲

b. 植栽基盤の適否及び必要土壌量

計画地内の土壌は、人為的影響を強く受けた造成土であり、有機物の堆積により生成された秩序性のある自然的な層位は認められない。また、全層にわたり固結し、緻密な壁状であり、若干還元状態である。なお、地下水は認められなかった。

地表の碎石層以下の土壌の物理性については、砂質埴壤土（SCL）であるが、飽和透水係数が低く、有効水分保持量が少なかった。

化学性については、全窒素や有効態リン酸といった土壌養分が不足していた。また、コンクリート夾雑物を由来と考えられるアルカリ土壌が確認された。

以上の結果から、計画地内の土壌は植栽土壌としては良好ではなく、土壌の入れ替えが必要と予測する。

なお、本事業の緑化計画において、植栽基盤の整備に必要な土壌量は、表 4.6.1-12 に示すとおり約 48m³と予測する。

表 4.6.1-12 植栽必要土壌量

区分	面積 (m ²) a	深さ※ (m) b	必要土壌量 (m ³) c (=a×b)
大景木の植栽基盤	約 48	1.0	約 48

注1) 深さ(※)は、下表を参考に設定した。

- ・植栽予定の樹木は 10m であるため、深さは樹高 7~12m で最も厚い深さである 100cm とした。

表 規格別有効土層の厚さ (参考値)

樹高※	12m 以上	7~12m	3~7m	3m 以下	芝生・草花
上層	60cm	60cm	40cm	30~40cm	20~30cm
下層	40~90cm	20~40cm	20~40cm	20~30cm	10cm 以上

※ 樹高は、生育目標の大きさ。

- 2) 有効土壌のイメージは、下図に示すとおりである。

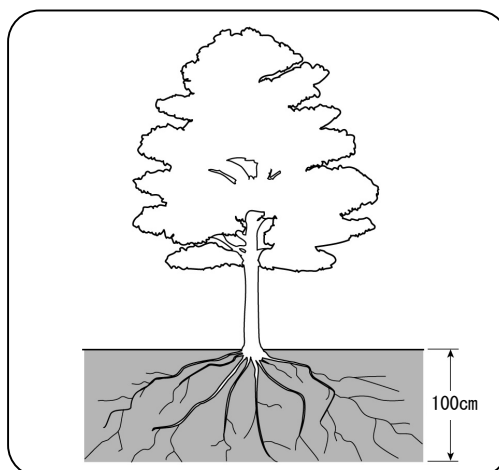


図 有効土壌のイメージ

資料：「植栽基盤整備技術マニュアル」（平成 25 年 12 月 改定第 2 版 一般財団法人日本緑化センター）

イ. 環境保全のための措置

本事業では、緑の適切な回復育成を図るために、次のような措置を講じる計画である。

- ・植栽基盤の整備にあたっては、土壌の入れ替えを行い、必要土壌量以上の良質な土壌を客土することにより良好な植栽土壌を確保する。
- ・防風植栽としての効果が表れるよう、十分に成長した樹木を植栽する。
- ・必要に応じて支柱を設置する等の転倒防止を図る。
- ・緑の質の確保のため、施肥、除草・草刈り等の適正な維持管理を行う。
- ・共同住宅・駐車場等の周囲について、計画的に植栽する大景木以外にも可能な限り緑地を確保するとともに、花や実を形成し、他の生物の生息・利用が期待される樹種を可能な範囲で選定する。

ウ. 評価

本事業における主要な植栽予定樹種であるタブノキは、耐風性及び耐陰性の樹種であり、計画地の潜在自然植生の構成種に該当する。

また、本事業の緑化範囲は、計画建築物等による日影や強風の影響を受けると想定されるが、耐風性及び耐陰性を持つタブノキを植栽し、適切に管理を行うことにより、計画地の環境特性に適合するものと予測する。

計画地内の土壌は人為的攪乱を受けた造成土で、自然的な層位は認められず、全層が固結した緻密な状態で若干還元傾向を示していた。砕石層下は砂質埴壌土（SCL）であるが、透水性と保水性が低く、窒素やリンなどの養分も不足しており、コンクリート夾雑物由来と考えられるアルカリ性も確認された。

以上の結果から、計画地内の土壌は植栽土壌としては良好ではなく、約 48m³ の土壌の入れ替えが必要と予測する。

植栽基盤の整備にあたっては、必要な土壌量以上の良質な土壌を客土することにより、良好な植栽土壌を確保する等の環境保全のための措置を講じる。

以上のことから、緑の適切な回復育成が図られるものと評価する。